
過去の私と未来の私

影武者アール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

過去の私と未来の私

【Nコード】

N0944C

【作者名】

影武者アール

【あらすじ】

両親を早く亡くした一步はバイトの日々…。そんなとき一枚の広告で夢見ることに…。彼女に待ち受ける運命とは…。

（前書き）

小説を書いたのは、この作品が初めてです。

そのため文章などの表現も分かりにくいかも知れません。

頑張って書いたのであなたの心に少しでも響いてくれたらと思います。

文章の無断使用・無断転載を固く禁じます。

私、さくらかずほ佐倉一步は今年大学に入ったばかり。大学入学と同時に両親を交通事故であっけなく亡くした。天涯孤独になっちゃった。だけど泣いてなんかいられない。大学の資金を貯めるためにバイトの毎日だったりする。でも、食べていくのが精一杯！。どこかに！！いいバイトないかな…。

そんなことを考えながら歩いてる。ふと、足元に違和感を感じて足首を見る。どこかの広告が右足に絡みついて離れない。

「かつこ悪いッ」

何気に剥がした広告を見る。

「これって」

一瞬、目を疑った。広告に書かれていたのは、家庭教師のバイト広告だった。内容を読むと、結城司ゆづきつかさ高校三年が目指す大学に無事に合格させること。報酬として一千万差上げます。っと書いてあった。今の私にとって願ってもないことだ。

だけど、不安がよぎる。こんなにおいしい話が転がっているはずもない。

しょせん夢、儚い夢、そう…思うことにした。

だけど、やっぱり頭から離れない。

しょせん私は弱い人間だ。少しでも楽な人生を考える。

お金があれば何でもできる。こんなに苦労しなくてもいいんだ。そんな事を考えていると、不意に電話を掛けなくなった。

気が付くと広告に書いてある電話番号を廻していた。

受話器から呼び出し音が聞こえてくる。

ツルルルル…

2〜3回呼び出し音になった。

ガチャ

「はい！結城でございます」

「もしもしッ」

「ヤバイ！繋がっちゃった！どうしよう！？頭が働かない。」

「あの〜。広告を見たんですが…。」

「ああ、募集の方ね」

「はい〜…」

「いつ、来ていただけるのかしら…まずはテストをさせて戴きますので。」

「テスト…ですか…！？」

「難しく考えなくて結構ですよ。司が気に入るかどうかの簡単なテストですので…」

「はあ…ッ」

一瞬、気が抜けた。テストって聞くと、どうしても成績が上位じゃないとダメっぽい。成績も決して悪いほうでもない。中の上くらい…。

そんな事を考えながら返事をする。

「では、明日伺います。私、佐倉一步さくらかずはと言います。」

「佐倉さんね。10時頃来ていただけるかしら？」

「はい！宜しくお願いします」

そう言うとおもむろに受話器を置いた。

「はあ…」

安心からか溜め息が漏れた。

それと同時に夢を膨らませる。

「一千万かあ〜」

自然に笑みがこぼれる。まだ決まったわけじゃないのに、あれをし

よう、これを買いたいなど欲望の数を膨らませていた。
やり慣れないことで疲れたのか？ベッドにはいったと同時に深い眠りについた。

明るい日差しが降り注ぐ。小鳥たちのさえずりが心地いい。外から慌ただしい車の音や学生達の笑い声も聞こえてくる。眠い体を無理やり動かす。太陽の光が目突き刺さる。

「まぶしーッ」

思わず目を覆った。

「…ッ」

カラッと照らされた太陽の光が鏡と窓ガラスに反射していつも以上に眩しかった。眠い目を擦りながら、ベッドの脇に置いてある卵型の置き時計をみる。

「…ッ！」

一瞬、目を疑った。もう一度見る。

「は…8時？」

急いで身支度を整える。朝ご飯をゆっくり食べてる時間もない。なぜなら電車の本数が極端に少ないからだ。通勤時間でさえ、一時間に3本しか走っていない。田舎暮らしに慣れてここに住んだ。でも一番の理由は家賃が安かったからだ。

こんな時は都会に住めば良かったと後悔する。そんなことを考えながら小走りする。家から15分くらい立つと駅が見えてきた。

「間に合った…」

いそいそと販売機で切符を買い発車時刻を見る。

「…ッ」

ない。

ない。

ない。

三分前に発車したばかりだ。つぎの電車を待つことにした。幸い2

0分も待てば次の電車がくる。ホッと一息つく。

ボーッと時計をチラチラ見ていると後から声を掛けられた。

「すみません！一人ですか？」

ふと見ると、スラリと伸びた長い足に可愛い感じのルックス風の10代の少年だった。

「ええッ」

声が引きつる。

「良かったら俺とお話しませんか？俺も電車行っちゃって退屈なんで少年はにっこりと笑いかける。悪い気はしない。むしろ心地良かった。」

「いいですよ」

声が弾んだ。

「お姉さんは、これから仕事??」

「まあね」

話を合わせることにした。本当の事を言っても良かったがただの暇つぶしの相手に正直にいうほどの事でもない。

「お姉さんの職場ってラフなとこなんだ!？」

「...」

ラフなとこ?その言葉がすごく気になった。自分で全身を見回す。

彼の言葉に納得した。

カラフルなミニワンピースにレースのレギンスに9cmのヒール姿だった。本来ならばスーツ姿にビシッと決めるんだけど寝坊した私はその場に適当に置いてある物を考えずに着てきたに過ぎない。

そんなくだらない話を彼と語り合った。気付けばあつという間に20分が立っていた。駅構内のアナウンスが響く。

「電車が来ますね!!じゃあ僕はこれで!」

軽くペコリと会釈をすると電車の中に消えていった。

「じゃあね」

彼に手を振って電車に乗り込んだ。

さあ！これからが勝負だ。気合いを入れよう。

ガタン…ゴトン…。ガタン…ゴトン…。

やがて目的地の駅についた。

駅改札を抜けて結城家に向かった。

この辺の家並みは、いかにも旧家のお家柄ふうだった。

でっかい屋敷と大きな蔵が建ち並ぶ場所に結城家はあった。家を前にすると、それだけであっかんされる。

溜め息が漏れる。

時計を見ると、約束の時間ギリギリだった。

意をけつしてインターフォンを鳴らす。

ピンポン。

「はい！はい！どなた？」

着物姿で品のある顔立ちの人だった。

「面接に来た佐倉と言います。」

「佐倉さん。お待ちしていました。さあ、こちらにどうぞ」

玄関口から垣間見える廊下や家具はいかにも年代風の代物ばかりだった。

おそろおそろ廊下を歩き通されたリビングには眩いばかりのシャンデリアに目を奪われる。

「さあこちらに掛けて」

「はい…。」

言われるままに素直に従った。

「佐倉さん、この子が息子の司です。」

そう言われ顔をみる。見慣れた顔があつた。驚いて、声をあらげる。

「ああ！？朝の…」

「知り合い？」

「いいえ…！！朝ちよつとお話ただけです…。」

焦り気味で何を言えればいいのか、頭が真っ白になった。

「司、この佐倉さんとは仲良くいけそうかしら」

「モチロン」

「司が気に入ったようなので、急ですが家庭教師をお願いします。

佐倉さん、それでいいかしら？」

「お願いしますッ」

ペコリと一礼する。

トントンびょうしに決まってい

心がついていけない。

気が付くと契約書を交わしていた。

夢うつつの状態だったらしい。帰り道をどう帰ったのかさえ覚えていない。

ただ、今、解ることは夢だと思っていた事が現実になった事くらいだ。

手元に一千万の小切手がある。

少し落ち着いた。

それと同時に安心からか涙が溢れてくる。

もう…。

お金の心配をしなくていいんだ。

普通の学生生活が出来るんだ。

安堵感が満たされる。何もなかった空っぽの心に水が満たされたようにおも

うにおも

う。幸せは自分で掴むものなんだ。

何が幸せかは誰にもわからない。
ただ、空っぽの心があったかくなるそれだけでいい。
以前の、下向きだった自分にサヨナラ。

私は変わる。
新しい旅立ち。

今日から新しい生活が始まる。
家庭教師のバイトで人生が変わった。

新しい発見。
それが私の旅立ちの一步なんだ。

（後書き）

最後までありがとうございました。

良ければ感想など頂ければすごく嬉しいです。

次回作も頑張ります。

読んでくれてありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0944c/>

過去の私と未来の私

2010年10月15日21時46分発行